

# 環境調和型の栽培漁業技術開発研究(アワビ)

(予算区分 県行 研究期間 平成15～19年度)

担当：伊豆分場

## 【研究の背景とねらい】

アワビ資源の増殖のために、広く稚貝の放流が行われていますが、通常の放流サイズである3cmの稚貝を育成するためには1年以上必要なため、多くの労力や経費が必要でした。そこで、従来よりも小型の稚貝でも生残率を高くできる放流方法について検討します。

## 【研究成果】

- ・サイズの異なるアワビ稚貝を放流してサイズ別の生残状況を調査した結果、殻長15mm未満と比較して15mm以上の生残率は高く、殻長30mm以上では生残率に差がないことが分かりました。殻長15～30mmではサイズにより生残率に差がある場合とない場合があります。
- ・放流場所の環境として転石数の違いについて調査した結果、転石数が少ないと大きな貝でも生残率が低く、転石数が多いと大型貝と比べより小型の貝でも生残率が同じ程度になる傾向がみられました(図1)。
- ・放流月、転石数、サイズ、放流数の複数の要因が生残率に与える影響について解析した結果、放流サイズが大きい場合、転石数が30個/m<sup>2</sup>以上の場合でオッズ比が高く、生残率が良くなる傾向が認められました(図2)。
- ・解析結果から計算した生残率の最大値と最小値の間には、約90倍の違いが見られ放流方法の改善により生残率を向上させることが期待できると考えられました。

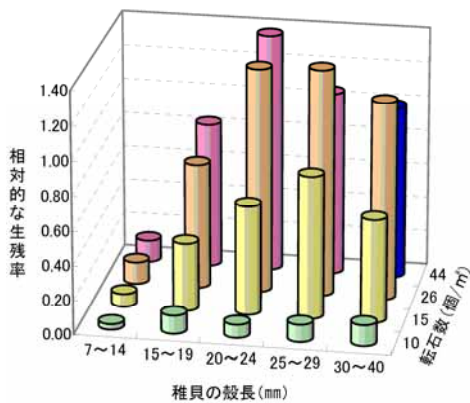


図1 放流場所の転石数とアワビ稚貝の殻長別の生残率  
転石数が44個/m<sup>2</sup>の場所に放流した殻長30-40mmの稚貝の生残率を1とした場合の相対生残率

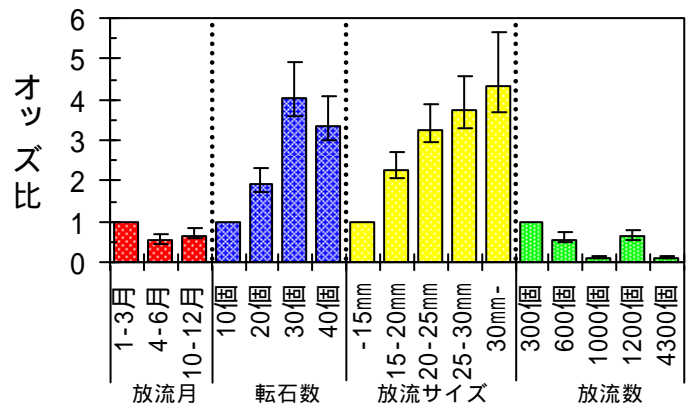


図2 放流条件が稚貝の生残率に与える影響  
各要因の最小カテゴリの生残率を基準としたオッズ比

## 【研究成果の普及方法】

- ・転石数に注目した放流方法を行うことで従来よりも小型サイズで放流が可能になり、少ない経費で安定的な漁獲量を維持できるようになります。

(作成 平成20年3月)